

『匡衡集』における中將尼との贈答歌

田中恭子

はじめに

お茶の水女子大学名誉教授関根慶子氏の提唱による『私家集全釈叢書』の刊行は数々の研究を世に問うている。私も『赤染衛門集全釈』の一員に加えて戴き、「赤染衛門について」の拙文も寄せたが、訂正すべき箇所が幾つもある。近年、まず斎藤熙子氏の『赤染衛門とその周辺』、そして林マリヤ氏の『匡衡集全釈』によって、匡衡の子息拳周の実母は中将尼であるとする説が出されている。

『小右記』長和元年（一〇二二）六月四日条では、匡衡が死に臨んで人を実資に遣し「病已臨急、非常在近、拳周及其母必可相顧者」と伝え、実資は、夜やって来た東宮学士拳周と逢って話している。拳周の母が赤染衛門であるとの認識を示すもので、『左経記』長元八年（一〇三五）五月九日条に「就中拳周母當時第一歌人也」とあるのも赤染衛門のことである。

本稿では、『匡衡集』七七―八六の贈答歌にかかわる人間関係を考慮して、拳周の生母は中将尼の姉妹であることを説く。

一、大江匡衡の「知」

大江匡衡（九五二―一〇二二）の特長を一言で表すなら、「碩学」であろう。辛口批評家とされる小野宮実資でさえ、匡衡の卒去に際して、日記に次のように認めたほどである。

當時名儒無人比肩、文道滅亡

（小右記、長和元年七月十七日）

曾孫の匡房は、『続本朝往生伝』で、一条帝の往生記を筆頭に置いたが、一条朝を

新しい日本の構築Ⅲ

支えた各分野の逸材の内、匡衡を文士の頭に挙げている。

時の人を得たること、またここに盛となせり。親王には後中書王、上宰には左相・儀同三司、九卿には右將軍実資・右金吾齊信・左金吾公任・源納言俊賢・拾遺納言行成・左大丞扶義・平納言惟仲・霜台相公有国等の輩。朝には廊廟に抗議し、夕には風月に預参したり。雲客には実成・頼定・相方・明理、管絃には道方・濟政・時中・高遠・信明・信義、文士には匡衡・以言・齊名・宣義・積善・為憲・為時・孝道・相如・道濟、和歌には道信・実方・長能・輔親・式部・衛門・曾禰好忠、画工には巨勢弘高、舞人には大伴兼時・秦身高・多良茂・同政方、異能には私宗平・三宅時弘・伊勢多世・越智経世・公侯恒則・参春時正・真上勝岡・大井光遠・秦経正、近衛には下野重行・尾張兼時・播磨保信・物部武文・尾張兼国・下野公時、陰陽には賀茂光榮・安陪晴明、有験の僧には観修・勝算・深覚、真言には寛朝・慶円、能説の師には清範・静照・院源・覚縁、学徳には源信・覚運・実因・慶祚・安海・清仲、医方には丹波重雅・和氣正世、明法には允亮・允正、明経には善澄・広澄、武士には満仲・満正・維衡・到頼・頼光、皆これ天下の一物なり。（日本思想大系『往生伝 法華験記』）

学問の家である大江家に生まれた匡衡が、祖父の維時に期待され、それに応じるかのように、七歳の読書始より翰林に重きを成すまでいかに研鑽したかは「述懐古調詩」（江吏部集、卷中）に見るとおりである。匡衡は、儒門の棟梁として、帝王の師として活躍し、『老子』『白氏文集』『文選』にも通じ、漢詩文をよくする文章家でもあった。儒仏の両道に帰依していたことは、『江吏部集』に、

口海浮般若、敬礼金剛拳 心台持妙法 帰依大宝蓮
と述べたり

毎日念持観自在 多年服仕仲孫尼

とあることにも窺われる。『本朝文粹』には、盲僧真救のための卒塔婆供養の願文、仁康上人が五時講を修するための願文、源宣方や一条院や寂心上人の四十九日の願文もしくは諷誦文、道長の木幡淨妙寺供養のための願文などが、申し文や詩序や表とともに取められ、仏典仏事に対する知識の深さを思わざるを得ない。

和歌に關しても、『後拾遺集』(注1)棹尾を飾る赤染衛門との唱和は、匡衡の「知」を重んずる面目躍如たるものがある。

めのとせんとてまうできたりける女の、ちのほそう侍りければよみ侍ける

大江匡衡朝臣

はかなくもおもひけるかなちもなくてはかせのいへのめのとせんとは(二二二七)

かへし 赤染衛門

さもあらばあれやまと心しかしこくばほそちにつけてあらずばかりぞ(二二二八)

このような知識人である匡衡の私家集『匡衡集』は、一一三首あり、匡衡の素養を汲まねば理解に苦しむばかりである。また、匡衡と贈答を成し得る人も、右の赤染衛門のように才人であろう(因みに赤染衛門は先掲『続本朝往生伝』の「和歌には」に載る)。碩学の素養に言及するのは笑止な業と忸怩たるものがあるが、問題を抱える七七―八六の十首を『新編国歌大観』が底本とする宮内庁書陵部蔵本(五一・二二三)に読点のみを加えて提示する。

二、中将尼との贈答歌

も、さかにやそさかそへて百をくのをのかさまくいかにあるらむ

返し

我身を本ちはふのたいのうへになるそこらのかすにいらす成けん

中将尼

とありし返し

身はたとひちはふのたいにいらすともむすふ心にいりぬへきかな

むすこのむまれたりしいゑをさりて後、そのこの藏人になりて、かの家になす

む人をかたらひてかよひ侍しに、其家なる紅梅をおりて、その家のあるし、

むかしみしむめの、こうはいに成たるみよとて、をこせて侍し

みとり子のうへし梅の花みぬ程にことしはあけに色そかよへる

又、中将あま

八二 色まざる宿からならはむらさきの千しほの色にそめこゝろみん

又、返し

八三 紫の千しほのやまの色ならばよろつ世よはふこゑもなひかん

このはなの、おい木になりたることなといひて侍しに、この家はかすかとい

ふ所に侍しかは

八四 このはなをおい木にしゐてきみなさはかすかのいゑのわかなくつみてん

返し

八五 あいをひのわかにはおほしかすかのにとしはかりをそつまはつむへき

二月に、雪のふりし日、同じところにやり侍し

八六 故郷の雪いかならしかすかなるみかさのやまをおもひこそやれ

返し

八七 春日のに雪ふることは絶たれとこ、にとふひはまたこそありけれ

中将尼

匡衡と中将尼との贈答歌は、右の十首である。当家集に見える人物は、「女」や「人」とあるのがほとんどで、わずかに男性は、三条院、能宣、輔親、実方が固有名詞で特定できるが、女性も、唯一人であり、特別な記述とみななければならぬ。赤染衛門や挙周や明順女のことさえ、「女」「子」「人」としか表さず、『赤染衛門集』を参照して初めて特定されるのである。七八に初めて見える中将尼が、七七以前に見える「女」「人」を改めた称と言えるか疑問のもたれるところである。

そもそも、当家集は、一から七六に至るまでは、一首の例外もなく、詞書を付している。けれども、七七は、七八と七九とで一まとまりであることはわかるものの、七六とは脈絡が無く、詞書を付さないために難解である。詠歌事情を示さないのは、脱落とも、故意に、とも考えられるが、七八によって、中将尼に宛てた匡衡の歌であることは確かである。また、七九と八〇が時間の上で連続するか否かは不明だが、八〇の詞書にみえる「藏人になりて」は、挙周が寛弘三年(一〇〇六)六位藏人に任ぜられたことを示し(注2)、八六まで一貫する内容である。

まず、七七について。

この歌の上二句「も、さかにやそさかそへて」は、誰もが行基の釈教歌を想起しよう。当代の『拾遺集』には次のように収められる。

大僧正行基よみたまひける

法華経をわがえし事はたき木こりなつみ水くみつかへてぞえし(哀傷・一三四六)

ももくさにやそくさそへてたまひてしちぶさのむくいけふぞわがする(同・一三四七) 『拾遺集』が「哀傷」に釈教教を含めるのは、同集を親撰したといわれる出家者花山院の意思とともに、当代の思潮を反映しているよう。寛和二年(九八六)に花山院は出家したが、その二年前の永観二年に成立した『三宝絵』下巻にも、行基のことは、ももさかにやそさかそへてたまひてしちぶさのむくい今日せすばいつかわがせん としはへにつつさよはへぬべしといふことは行基菩薩の唱へたるなり

と引かれる。著者の源為憲は、先掲の『統本朝往生伝』に、匡衡と同様、「文士」に数えられている天下の一物であり、勸学会の結衆の一人として信仰篤く、冷泉院第二皇女尊子内親王のために書かれた同書は、翌年成立した源信の『往生要集』とともに影響力は大きいものであつたらう。この百八十の乳に母への報恩を説く仏典は、『父母恩重経』『心地観経』『中陰経』などに原據があり、東大寺造立勸進をなした行基の歌は、人口に膾炙していたことは想像に難くない。『三宝絵』がよく引く先行作品の一つに『日本霊異記』があるが、行基の話もあれば、「凶しき人、嬪房の母に孝養せざして現に悪死の報を得る縁第廿三」といった話なども収めている。

七七の歌も、右の行基の歌をふまえて、受取人である中将尼の出家を見舞つた時のものではないか、その中将尼が挙周の母か、と説かれたのである。

確かに、上二句の引用は、そうした理解にも傾くけれど、乳を与えるのは、実母でなくとも、養母や乳母のような存在でも可能であるし、そういう人の象徴的表現ともみなせる。また、三句以下の歌句も吟味せねばならない。引歌の意を込めつつも、匡衡のような歌人は、一目で典拠と同じ趣向にしかみえない単純な作歌をよしとするのか疑問がもたれる。

そこで、三句の「百をくの」に注目すれば、「の」の下に補うべき語は百、八十に添えるのと同じ「さか」であろう。これを乳量とすると、「百億の石」にもなつてしまひ、百石に八十石を足した母乳でも相当量なのに、あまりに飛躍した数のように思われて、三句になぜ「百億」を用いなければならないのか、その必然性が問われる。百億は、「もも」(百)、「やそ」(八十)という和語から離れ、漢語としか考えられず、「ひやくおく」と字音でよむしかない。歌語にふさわしくない語で、管見によれば、和歌にこの語をとり入れた例が皆無なので、こういう膨大な数を用いるのは、仏典に拠るものと解した。仏教では、百億は、大千世界のことである。さすれば、上二句にみえる「さか」は、「釈迦」を指す、と考えられる。「石」も「釈迦」も、拗音であつ

たとしても、「さか」と表記される。

次いで、「百億の釈迦」は、『三宝絵』の翌々年の成立になる、これまた、源為憲の書き記す『太上法皇(円融院 御受戒記)(注3)』に、「百億蓮葉乃釈尊」と見える。円融院は、寛和元年(九八五)に出家したが、翌二年東大寺で受戒した。同書は、受戒の儀式の動向や扈從した天下の僧俗の役柄も交えて詳述している。円融院の別当であり参議左大弁の大江齊光は、匡衡の叔父であるが、この時、御戒牒状を仰せによつて作り、齊光男の覚静は、羯磨沙弥として奉仕していることも見える。そして、「百億蓮葉乃釈尊」は、権律師真喜が御導師となり、円融院に授けた沙弥戒の詞の中に、次のように言つたと書き留められたのである。

十戒_波即十善。此度_乃受給戒_加。先_爾鵜珠_手守給_天。次_上鳳闕_波出給_{留物}。誓_手自_良落給_之悉達_{太子}乃_昔思遺_{檀特}乃_山波_跡暗_見悲_人少_有戒_手。人_爾受給_禪定_聖主_乃今_奉禮_波。日本_乃國_波舉_天恩_手惜_半〔涙會〕繁_加。我聞_後。一時禪定_乃帝_先爾_出給_利給_留。萬機_爾年_積天_古四海_波遁_御座_波。鳳曆_波霜_不幾_須。龍顏_波浪_未浸_須御座_手爾_之。菩提_乃御意_乃發_介發_介實_物良_加。悲_會思_加。五篇_七聚_乃戒_今日_波會_悉持_御座_波。苔_不穿_輕御步_波。蓮_爾受_天不_傾可_レ候_加。見聞_隨喜_乃若_干乃_人。御功德_手分_天給_利下_爾。落淚_波衣_爾懸_天醉_乃鄉_乃珠_會殘_波。千葉_花臺_乃舍_那百億_蓮葉_乃釋_尊。諸_共上_百年_戒手_守給_天。九品_蓮昇_給聞_支五_了給_波。御功德_不限_須。法界_衆生_天萬_普及_半。廻_二向_大菩_薩。

円融院が在位期間も短く、その龍顔に皺もない二十八歳の若さで受戒されることを悲しみつつも、「千葉花台の舍那」と「百億蓮葉の釈尊」がもろともに「九品蓮」に導いてくれるよう、大菩薩に回向した、とある。この沙弥戒は、円融院に授けられたのみならず、当時、普遍的に浸透せるものであつたらう。

右の詞の由来は、『梵網経』の次の条に求められよう(注4)。

爾時盧舍那佛即大勸喜。現_三虚空_光體_性本_原成_佛常_住法_身三_昧示_三諸_大衆_一。是_諸佛_子。諦_聽善_思修_行。我_已百_阿僧_祇劫_修行_心地_一。以_レ之_爲レ因_初捨_二凡_夫成_三等_正覺_號爲_三盧_舍那_一。住_三蓮_花臺_藏世_界海_一。其_臺周_遍有_三千_葉一_一。一_葉一_世界_爲三_千世_界一_一。我_化爲_三千_釋迦_一。

據「千世界」。後就「一葉世界」。復有「百億須彌山百億日月百億四天下百億南閻浮提。百億菩薩釋迦坐百億菩提樹下」。各說「汝所問菩提薩埵心地」。其餘九百九十九釋迦。各各現「千百億釋迦亦復如是」。千花上佛是吾化身。千百億釋迦是千釋迦化身吾已爲「本」。原名爲「盧舍那佛」。

「偈」には次のように説かれる。

我今盧舍那。方坐蓮華臺。周匝千華上。復現千釋迦。一華百億國。一國一釋迦。各坐菩提樹。一時成佛道。如是千百億。盧舍那本身。千百億釋迦。各接微塵衆。俱來至我所。聽我誦佛戒。甘露門則開。

是時千百億。還至本道場。各坐菩提樹。誦我本師戒。十重四十八。戒如「明月月」。亦如「瓔珞珠」。微塵菩薩衆。由是成正覺。是盧舍那誦。我亦如是誦。汝新學菩薩。頂戴受持戒。受持是戒已。轉授諸衆生。

諦聽我正誦。佛法中戒藏。波羅提木叉。大衆心諦信。汝是當成佛。我是已成佛。常作「如是信」。戒品已具足。一切有心者。皆應攝佛戒。衆生受佛戒。即入「諸佛位」。位同「大覺」已。眞是諸佛子。大衆皆恭敬。至心聽我誦。

円融院が受戒した東大寺の大仏こそは、千葉花台の盧舍那仏のことであり、千葉花台たる蓮弁毛彫は、『梵網經』による凶像といわれている。東大寺の教えは『華嚴經』を根本にしているというが、天台大師智顛も『梵網經』を『華嚴經』の結経と断定している程であるから両経は同じ思想系統の經典とみなされている(注5)。空海も『梵網經開題』を著している。『三宝絵』には、「梵網經に宣はく……」「梵網經に云はく……」としばしば引かれ、当時、広く流布し、受持されていた。その上、『梵網經』の十重四十八輕戒が、「孝順心」を強調し、僧や父母に対する孝養を説くところは、儒教的で、文章生から累進した為憲や匡衡には容易に受持されたと思われる(注6)。以上のように、三句までをとらえると、匡衡が歌を贈った中将尼は、受戒して盧舍

那仏に結縁した身だと考えられる。下句の「をのかさまくいかにあるらむ」は、現在どうしているのかを問うものであるから、「をのかさまく」の中には匡衡は含まれず、相手方複数(中将尼母子)に対する消息だと解さねばならない(注7)。

歌意の大意は、「盧舍那仏に坐す蓮華台には、百の釈迦に八十の釈迦を加え、百億の釈迦が化身しているが、そのように仏と結縁して出家者の一員となられたあなた、そしてその身を分けたお子は、それぞれ、今は、どうしていらっしやるでしょうか。」

七八は、「をのかさまく」に対して、初句から「我身を」「我が身を」の本文もある)と、中将尼自身のことを答えた歌である。匡衡が、中将尼方の複数宛に現状の如何を消息しているのに、一人、中将尼の身の上を語るのが七八である。この歌は、贈歌の「百をく」に対応して、「そこらのかす」と言うし、「も」「やそ」には、「ち」で応じた。「ち」と表すのは、数字の「千」の訓よみを取り入れたのであろう(注8)。匡衡のいう「百億の釈迦」が『梵網經』に拠っているのを知って、中将尼が同経の「千葉」を用いたのであろう。「ちはふ」とは、「千葉生」であろう。下に「たい」とあるのは、蓮華台の「台」。蓮の花びらが千枚生えている台のことを、「千葉生の台」と表したものと成る。先掲の『太上法皇(円融院)御受戒記』に、「千葉花台(舎那)と見えるのと同じ趣である。

本文異同に「ちは」「ちか」とあるのも、『梵網經』自体に「千花」とも「千葉」ともある(大正大藏經No一四八四)、異同が生じる余地はあるし、却って、この異同こそが『梵網經』を典拠にしていることを物語ろう。『梵網經』を知る僧俗は、当時、少なからずいたにせよ、匡衡の「百をく」に対して中将尼の「ちはふのたい」は、作歌上、対等の力量を思わせ、中将尼のように、和歌に訓じて取り込む例も類が無い。七八の歌意の大意は、「私の身なんぞは、千葉の蓮台上に釈迦として化身するようなあなたの出家者の数の内には入れなかつたのでしようね。」

中将自身は、受戒したものの在家の浅い悟りであることを自嘲気味に吐露しているものようだ。そういう返歌があつたので、七九で、匡衡は再び、「貴女の身が、たとえ、千葉蓮台上の釈迦に化身した数の内に入らなくとも、仏と結縁したことは多とすべきですよ。」と慰めたのであろう。

七八、七九では、「身」は「実」、「成る」は「生る」を掛詞とし、「実」「葉」「生る」は蓮台の縁語としている。七七の詞書が無い(ため)、詠歌事情は不明であるが、「百をく」を手懸りにすれば、以上のごとくなる。匡衡も、中将尼も、中将尼が出家した

のは過去のこととして、現在の状況を尋ね、また、応ずるのである。これらが、中将尼の出家時を見舞う歌とは思えない。匡衡と中将尼方との間には、八〇以下の詞書や歌に見えるように、長らく途絶えていた経緯がありそうだ。その経緯は不明だが、七七も、途絶えていた関係を復活させる機縁となつていようか。中将尼との応酬歌の一群という意味で、七九は、八〇にも繋がる。

三、明順とその子

中将尼に関する資料は少なく、『尊卑分脈』『後拾遺集勅物』『勅撰作者部類』によつて整理すると、「左中将源英明孫、大和守清時女、前筑前守高階成順母、号中将尼、哥人、後拾遺集作者」となる。歌人といつても、『後拾遺集』『玄々集』『道綱母集』に各一首採られているのは、この『匡衡集』と『赤染衛門集』に数首残すのみである（それゆえ、いっそう『匡衡集』七七―八六が重い存在なのである）。『玄々集』には、「あきのぶが言ふことありけるころ、しがみけるすぎむらすぎぬればそならぬことも忘れぬるかな」とあるので、高階明順との関係は明白であり、「杉」を詠むのは、父の清時が大和守であつたために、明順を通過させたのが大和の家であることを暗示しようか。明順との間に成順を得た。成順の名は、明順父の成忠と明順に因むのであろう。菅原道真女を母とする源英明が漢詩文をよくする中将であつたことや、清時が大和守であつたことは、近衛（天皇の近き衛である大将、中将、少将）の異称としての御蓋（天皇の御蓋）すなわち三笠山であり、中将尼の号を導くものだ（八五歌参照）。また、大和守には清時も成忠も任じていることや、両家とも漢学の家であること、世代を共通していることなど年齢上も無理なく、若い明順と中将尼とが婚姻を結んだことに不釣合なもの無さそうだ。『赤染衛門集』に見られる、明順女の代作をする中将尼は、明順との間にむすめを産んだものと考えてよからう。

明順女は、中将尼の実子ではないという見方もあるが、明順が、宇多天皇の流れの中将家の家柄の人のもとへ通うことはあつても、他女との間にもうけた幼い女兒を連れて婿入りし、この女兒をその人に養わせるとは、当時の習俗からしても考えにくいことである。やはり、中将尼のむすめの方が自然である。招婿婚であつても、名は、父方に負うて「明順女」となる。中将尼は、父の源姓と財産を受け、大和の家の主となるのであつた。比較的早い時期のことであらうか。

道綱母との交流も「家」を介して窺える。道綱母の没年が長徳元年（九九五）であるので、左掲の贈答歌は、これ以前には中将尼は既に出家して、後述するように、明順一族の遭遇した長徳の変には関与しなかつたであらう。『道綱母集』を見よう。

中将のあまに、家をかり給ふ。かしたてまつらざりければ

はちすばのうきはをせばみこのよにもやどさぬつゆとみをぞしりぬる (三三三)

かへし

はちすにもたまよとこそむすびしかつゆはこころを置きたがへけり (三四)

あはた殿みて、かへり給ふとて

花すすきまねきもやまぬやま里にこころのかぎりどめつるかな (三五)

この歌は、はじめの二首で、中将尼と道綱母間に不動産（家）の貸借関係の不具合を表すかともとれたが、三五も含めて、粟田に山荘をもつ中将尼に対し道綱母が逗留したいと頼んだが、蓮に結んだ手紙がうまく通せず、今晚も泊めてもらえないのか、と恨んだものの、中将尼の返事に接して、また弁解したのであらう。出家者中将尼の余裕と親愛関係を汲みたい。

中将尼の出家は、長徳より大分前のことであらう。そして、明順とは早々に絶えたと思われる。明順は、一条朝になって、姪の定子が中宮になると、中宮大進、同亮、皇后宮亮と付随した。高階家は皆、重用され、父の成忠が二位にまで昇り、きょうだいの貴子の夫である藤原道隆が積善寺供養をした（注9）正暦五年（九九四）の折にはその盛儀に、「明順の朝臣の心ち、空を仰ぎ、胸を反らいたり」（枕草子、「関白殿、二月廿一日に法興院の積善寺といふ御堂にて」の段）と得意気な様子が伝えられてもいる。が、翌年道隆が亡くなり、次いで長徳の変によつて、甥の伊周や隆家の左遷以降、一族の末路は悲劇的であつたが、長徳四年、郭公を聞きたいという清少納言一行を別荘に招いて、明順は家の主としてもてなす明るさを失っていなかった（同、「五月の御精進のほど、職におはしますころ」の段）。明順の本邸は、二条にあり、『小右記』長徳二年六月九日条には、定子が身を寄せたりしている。悲運に遭つて、いっそう、高階家は結束し、明順はその柱となつた。権力を掌握した道長にも疎んぜられず、伊与守に任じ道長の法華講に非時をつとめるなど、むしろ親しくした。男児の成順は、その間、文章生から仕官する高階家世襲の人となつて、おおよそ匡衡男の挙周と同じコースを歩んだようだ。けれども、中将尼は、こうした明順の運命の浮沈に全く関与した形跡をもたない。

一方、明順は、長徳四年ごろ、妻がお産をしたらしい。『源兼澄集』に、兼澄が七日の産養に詠んだ歌が残っている。

伊与の守明順が妻の、子うみたりし七日夜、美濃の守共政がかたらひ侍りしなかにて、むかしのことを思ひいでて侍りし

いにしへのことこそけふはおもほゆれひさしかるべきしるしなるべし (四五)

明順の任伊与守は、寛弘年間。『権記』長徳四年九月一日条が、「前美濃守共政朝臣」の六十歳を過ぎての身の不遇と「臨病命危」を伝え、翌年九月三日条に、「故共政朝臣周閔法事料」として行成が法華経外題を書いた、と伝える。お産した妻は、共政の妻であった人で、生まれた子も共政の子であろう。歌に「いにしへのこと」とある中に、故人の子をしのばせている。そして、その命の長久を祝っているのである。七日の産養には、命名もあったことだろう。『尊卑分脈』に、明順の子として、成順のほか、「経重」が載るが、成順の名とも通ずるところなく、明順ら高階家側を継ぐ影もない名である。藤原共政には「親重」という子があり、『太上天皇(円融院) 御受戒記』にも見えるが、『拾遺集』哀傷・一三〇五によれば、永祚元年(九九九)に早世している。村上朝の藏人から吏部を経て大式にまでなった共政が、晩年、孕んだ妻を、明順に託したものと考える。七日の産養のめでたい、公式な儀に、晴れの歌として詠じたと解すべきであろう。明順の義侠心は、彼固有のものでなく、赤染時用のそれでもあった。男が、こういう形で子を得ることもあるのだ。明順の卒時の肩書が、播磨守であるのは、往年の共政が播磨守であった(類聚符宣抄) ことと無縁ではなからう。官職の推移は、利権がらみで、無縁な人事が行なわれていないことは、国司補任や公卿補任の示唆するところである。明順は、若き日の中将尼との間のむすめは、春日に手放して、壮年に、経重を養う家庭を得、寛弘六年(一〇〇九)、前年生まれた敦成親王呪詛事件に連座して死んだ。中将尼は本稿に記す通り、寛弘年間、明順女に挙周を迎えたものの、成順が万寿年間(一〇二四—一八)に筑前守になったのに伴い、下向した。『後拾遺集』雑五・一一二九は最後の消息である。

父のともに幼くて筑前国に侍りて、としへてのち、成順かの国になりて侍り

ければくだりてよめる

そのかみの人はのこらじはこさきの松ばかりこそわれをしるらめ

中将尼

四、挙周の生母

中将尼と明順について垣間見たことを考慮に入れて、再び、『匡衡集』八〇—八六を考える。

八〇の詞書を要約すれば、以下のようになる。

匡衡は息男挙周の生まれた家を去っている。

口挙周は六位藏人になっている。

八挙周は、生家に住む女(明順女)と親しくなつて、そこへ通っている。

二挙周の生家には、紅梅があつて、その家のあるじ(中将尼)が、「昔、匡衡が見た梅だ」と言つて、折つて寄こした。

ところで、八〇の歌は、誰が詠んだのであろうか。詞書「侍し」に続けて歌になる

として、中将尼の歌だとしたら、八一の詞書は、「又」だけで済む。二首続けて中将尼の歌だとしたら、八二の詞書は、単に「返し」でよいはずだ。「又、返し」と書く

のは、八〇が「返し」の歌であるためである。八〇が、匡衡の返し、八一が再び中将尼がよこした歌、八二が再びの匡衡の返し、となる。七九は八〇の贈歌ではないから、

八〇の詞書の中に、八〇(の返歌)を促す内容があるのだろう。すなわち、八〇は、

詞書の中の中将尼の「むかしみしむめの、こうはいに成たるみよ」に対して、返した

匡衡の歌である。

八〇の歌は、挙周が乳児の頃植えた梅の花を見ないうちに、今年は明けて、紅梅の

花をつけている事実を前にしたものである。中将尼は、梅を老木というまで見続けて

いたのだから、「みぬ程に」とは言えまい。八〇の作者は匡衡である。昔見たのに、

見ぬ期間が長かったから、中将尼が見せようとして紅梅の花を送ってきたのである。

挙周が生家を去つたあと、長じて明順女に通つてきていることをどう受けとめている

のか、中将尼が匡衡に紅梅を媒体に尋ねたものであろう。それに対して、匡衡は、「み

どり子であつた挙周は、昨年までは、みどりの袍を着る六位藏人だったが、年明けて、

朱の袍を着る五位に叙されて、そちらのお嬢さんに通っているのです(青二才の息子

も恋に心を赤く染めるようになりました。)」と、二人の間を容認している。

八一では、再び、中将の尼が、「みどりの袍から朱の袍にと昇進なさるお家柄の挙

周さんであれば、紫も千入の色に染めあげた濃い袍を着るように娘に対して深く心を

染めるのか期待しましょう。」と言つてきた。そこで、又、八二で、「挙周が紫を千入

に染めた高位の袍を着たら、天皇の万歳を祝す近衛の中将尼様も、心を寄せてくれるのでしよう。」と匡衡が返したのである。

八〇、八一、八二は、挙周と明順女の結婚をめぐる、より深い愛情を期して匡衡と中将尼が、親同士のかけひきをしている。少し、詳しく説明しよう。

匡衡は、尾張守在任中から熱田神宮に挙周の任官を願っていたことが、『朝野群載』文筆部「大江匡衡、熱田宮祈請男挙周明春侍中所望状」によって知られる。寛弘三年（一〇〇六）、願叶って挙周が六位藏人となったことは、『匡衡集』に、「この上のうれしきことよりほかにのみなん、このころさらにおほへはへらす」(七三詞書の一部)と手放して喜んだ。妻の赤染衛門も、女房を介して任官を望み、ようやく藏人になった挙周が明順女に通う暇がないことなどを記し、中将尼は明順女に代わって、待つ身の苦しさを訴えている(本稿の末尾に『赤染衛門集』二二四—二二三を付したので参照されたい)。そこに、五位になったことを誇らしげに匡衡が言うので、四位以上の紫を、中将尼がもち出したのである。中将尼は、赤染衛門の存在に一目置いて、みどりも赤に染める家柄だ、みどりから朱へと袍の色が勝る家柄だ、と認識して「色まさる宿から」と詠んだのである。「赤染」の榮爵を言うのなら「千入の紫色」を、と中将尼は望んだ(注10)。みどり、朱、紫の色の袍、その順に官位は昇るので、結婚に際して袍の色は大事であった。『源氏物語』でも、夕霧が雲居雁と結婚したいと願うのに、雲居雁の乳母が「めでたくも、もののはじめの六位すくせよ」と眩いて結婚は延期されてしまった(乙女巻)。「みどり子」だった挙周も、その父匡衡も、今は「赤染」を家あるじとする一家の人たちである。中将尼は、欲を出して紫の袍の挙周を、と言ってみた。匡衡は、当家を「色まさる宿から」と評されたので、八二で「よろつ世よはふこゑ」と中将尼家を表してやった。中国に「山呼万世」の故事があり、漢の武帝が嵩山の太室に登った時、どこからともなく、万歳(万世)の声が聞こえたという(史記の「孝武本紀、漢書の「武帝紀」)。この故事をふまえて、『拾遺集』賀・二七四に、仲算法師が次のように詠む。

声高く三笠の山ぞよばふなるあめの下こそ楽しかるらし

『道綱母集』にも、次のように詠んでいる。

当帝の御五十日に、ぬのこのかたをつくりたるに

よろづよをよばふ山べのぬのこのこそきみがつかふるよはひなるらし(一〇)

三笠山は、天皇の御蓋、すなわち天皇の近衛として、大将、中将、少将の謂ともな

る。道綱母も、兼家が右大将であったことを「よろづよをよばふ山べ」と譬えているのと同様に、匡衡も、中将尼家を「よろつ世よはふこゑ」に譬えた。大将、中将の名譽を込めて、こういう表現をされると受け手は得心がいったらう。

匡衡は、挙周を掌中の玉としているが、中将尼も、明順女を思うこと同断である。親同士の達引は、家柄や位階にこだわらつても、内実、愛情の深さを云々しているのである。

八三の詞書と歌の解は、「中将尼が、この紅梅が老木になったことなどを言って寄こしましたので、この家は、春日という所にありましたから」匡衡が次のように詠んだ、「この紅梅の花を、老木だとあなたが無理にも言うのなら、老いに効くという春日の家の若菜を摘めるはずです」。匡衡は、梅の木が年を経たことを言われると、その紅梅は、朱の袍を着ている挙周の謂なのだから、老紅梅には若菜を配するがよい、としたのである。春日野に若菜を摘むのは、古来、若返りの呪術として知られているが、匡衡は、単なる春日野の若菜を求めているのではない。歌句に「かすかのいゑのわかな」と指定したのは、中将尼家のむすめである明順女を特定したのである。中将尼が紅梅を老木になったと言う裏には、挙周が中将尼方を去って長年を経た感慨がある。匡衡は、ずっと挙周と共にいて、老木と譬えられたのは心外であった。それで、老木に「しるてきみなさは」と言う。そう言われてみると、確かに挙周も若い。

八四で、中将尼は、春日の地で、この若い二人を育てたこと、年を積んで老いたのはわが身ばかりであったことを吐露せざるを得なかった。「揃って生まれた春日の若菜のように、挙周さんとうちのむすめは育てましたが、私は若菜摘みの春日野に年ばかりを積み重ねた積むのでしょうか。」

中将尼は、挙周と明順女が同じ地から、二人生まれたことを「あいをひ」としているのだから、すなわち、挙周と明順女とは、双子でもきょうだいでもあり得ないから結婚するわけであって、生家に成長を共にする乳児期があることは、中将尼とそのはらからが自分の家で、それぞれを産んだ、とみななければならない。この二人は、イトコ同士であろう。子どもは、母方の里に生まれ育てられる。

ここに至って、最初の「も、さか」の歌に百石讃嘆を込めている匡衡の気持ちが見えらる。匡衡が中将尼のはらからと思われる挙周の生母と早々に不縁になれば、中将尼は、むすめも甥も二人とも生育させる任を負うこと必至である。次の「ちはふ」に、乳もしくは嬪房を潜ませていると読めようか。

八五、八六で、「故郷」といい「ふるごと」とあるのは、不縁となった匡衡の過去を暗示する。八〇の歌で、今年が明けたことを言ったが、八五は、二月になっている。

「二月に雪が降った日、同じ春日の家にやりました歌 むかし棲んだ春日の雪は、今、どんなでありましょうか。春日にある三笠山に因む中将尼様に思いを馳せまますよ」。八六は、それに対して、「春日の地に雪が降る、旧る事の關係は絶えてしまつたけれど、春日野の峰はまだあつて、訪う日はあつたのですねえ。」

「故郷」は、匡衡が通つて棲んだ女のところ。匡衡とその女のことは、「ふるごと」になつてゐる。赤染衛門が、家集一〇〇の詞書の中に「今は絶えにたり」と言つた相手であろう。このように、すっかり過去のものとなつて絶えていた大和は春日の家に、次の世代が新しい恋を交わせた。

おわりに

『匡衡集』七七―八六の十首は、以上のような意を表していることになり、挙周の生母を中将尼とする説には沿えなかつた。未詳の生母を想定しているかに見えようが、それは、『匡衡集』一五で、「あらし吹く關係になつたと表した大和国の女である。生まれた挙周も、「みどり子」のうち匡衡に引き取られた。『赤染衛門集』五四二に、「千世へよとまだみどりこに有しよりただすみよしの松をいのりき」と赤染衛門が詠んだのは、「みどり子」の時から育てた思いの深さがあつたからだろう(注11)。「はじめに」で紹介したように、当時の人々が挙周母赤染衛門と認識していたのも首肯される。『赤染衛門集』には、ほかに、「いかのほどなるちごを、ちちのむかふる」こと(五四四)も記されていて、父方に引き取られる児のことが知られるが、男児である。明順女と挙周の間も、早々に「嵐のいたく吹きしまざれ」(同、二二八)を生じ、生まれた男児は、挙周側で引き取つた。成衡と名付けられたのは、高階家側の「成」と匡衡の「衡」を合わせたものであつたろうが、大江家を世襲させ、文章生から昇進した成衡も、又、父祖の面目を保つた。成衡が息男匡房を得た七日夜、赤染衛門が、大江家の家風が絶えなかつたことを胸のすく思いで、「千代をいのる心のうちのすずしきはたえせぬいへの風にざりける」と詠じた(同、五七五)。

若かりし頃、祖父維時も父重光も式部大輔に任じた家柄の者として匡衡が、そして同じく式部大輔成忠男の明順が、ともに、漢詩人にして中将だった源英明の孫むすめ

たち(大和守清時のむすめたち)に、憧憬の念を抱いて通つたであろうことは、非現実的なものではない。『栄花物語』「さまざまのよろこび」でも、若き日の藤原道長とて、源倫子との結婚は高嶺の花だったことが知られる。左大臣源雅信は、「あなものの狂ほし。ことのほかや。誰かただ今さやうに口わき黄ばみたるぬしたち、出し入れては見んとする」と言い、婿として出入りすることを拒んだ。その道長も「はつ花」において、頼通が具平親王女隆姫と結婚する際「男は妻がらなり。いとやむことなきあたりに参りぬべきなり」と恐懼して婿に参らせた。親として有利な縁組を願うのも、当家集に見たとおりである。若い男は、自分の家よりは上の家柄の賢女を望むものであつた。そこには、『源氏物語』「帚木」の藤式部丞ではないが、教養ある博士の女もいるのだ。中将尼の「千葉生の台」の詠歌には並々でない技量を察した。又、挙周が、血縁の大江雅致のむすめと親しくしたり(赤染衛門集、一九四)、イトコと思われる明順女と結婚したことも、当時の通婚圏として一般的である。『源氏物語』「乙女」の夕霧と雲居雁の例は既に述べたが、光源氏と葵上、匂宮と六の君もイトコ同士である。生まれた男児が父方の職掌や家風を継ぐことや、反対に女兒が母方を離れず家屋敷を継ぐことも、命名や「家の主」に反映している。『匡衡集』七七―八六のわずかな解釈を試て、当時の人脈が密接に繋がつてゐることを確認した。そして、その人脈は繋がつてゐる一方、絶えるものでもあつた。

中将尼と明順が、再び関わつた形跡を残さないように、中将尼のはらからとは匡衡も絶えてしまい、二度と関わらなかつたのであろう。それは、遙かな若い時の「ふるごと」として封印されたのである。

注

- 1、勅撰集、私撰集、私家集は『新編国歌大観』に拠り、表記は読み易くした。
- 2、『御堂関白記』寛弘三年三月四日条。
- 3、『群書類従』巻四二七所収に拠る。
- 4、『梵網經』本文は『新修大正大藏經』No一四八四に、「偈」は『大藏經講座』第五巻に拠り、傍線は私に施した。
- 5、大野達之助著『新編日本仏教思想史』一一四ページ他。
- 6、『梵網經』「父母恩重經」は偽經であっても当時一般に流布し受容されていた。

- 7、『とりかへばや』巻三には、本来女である大将が子を生んで身二つになるくだりを、「この夜中ばかりになん、からうして、おのがさまぐくになりてなん。」とある。
- 8、底本の写本は、千を意識して「千とり」(二三)、「千鳥」(六三)とあるが、「ちはふ」にその認識は無い。
- 9、積善寺供養の願文は、匡衡作。
- 10、勿論、色の展開は、愛情の深さを導くものと期待している。
- 11、みどり子と住み良くしたい、と住吉に祈願してきたのである。

資料 赤染衛門集

たかちか、あきのふかむすめにもいひそめて、新藏人にていとまなくて、えいかぬにやらんといひしにかはりて

二四 暁の鳴のはねかきにめをさめてかくらんかすをおもひこそやれ

返し、中将の尼

二五 夢にたにみぬよのかすやつもらんしきのはねかきてこそたゆけれ

同人にゆきのふかひいやらんすみしひかは

二六 御吉野の山のはつ雪詠らんかすかの里も思ひこそやれ

返し、中将尼

二七 詠めやる山辺も見えず思ふより松の木葉や雪かへすらん

此人をこゝにむかへてすみしを、はかなしこゑしてむつかしき事ともなとあり

しに、その比、はせにまうてたりしに、もみちを、らせ見せんとおもひしに、

かうはらたちにしかものにさしてをきたりしかは、かれたりしをみて

二八 つとにとておりし紅葉はかれにけり嵐のいたく吹しまきれに

春になりてほかへわたりにしに、そのまへの梅のさきたりしをおりてやりし

二九 いかはかりほとかはへましきく花のちらんまてたにまてはまてかし

ちこをはこゝにむかへておきたるに、こまのかたをつくりておこせて

三〇 わかのへになつかぬこまとおもふにはなれにけるをなくさめにせん

返し

三一 そのこまはわれに草かふ程こそあれ君かもとにはいかにはやれは

この人ことをとこのもとにやりけるふみをもてたかへてきたりしに、たかちか

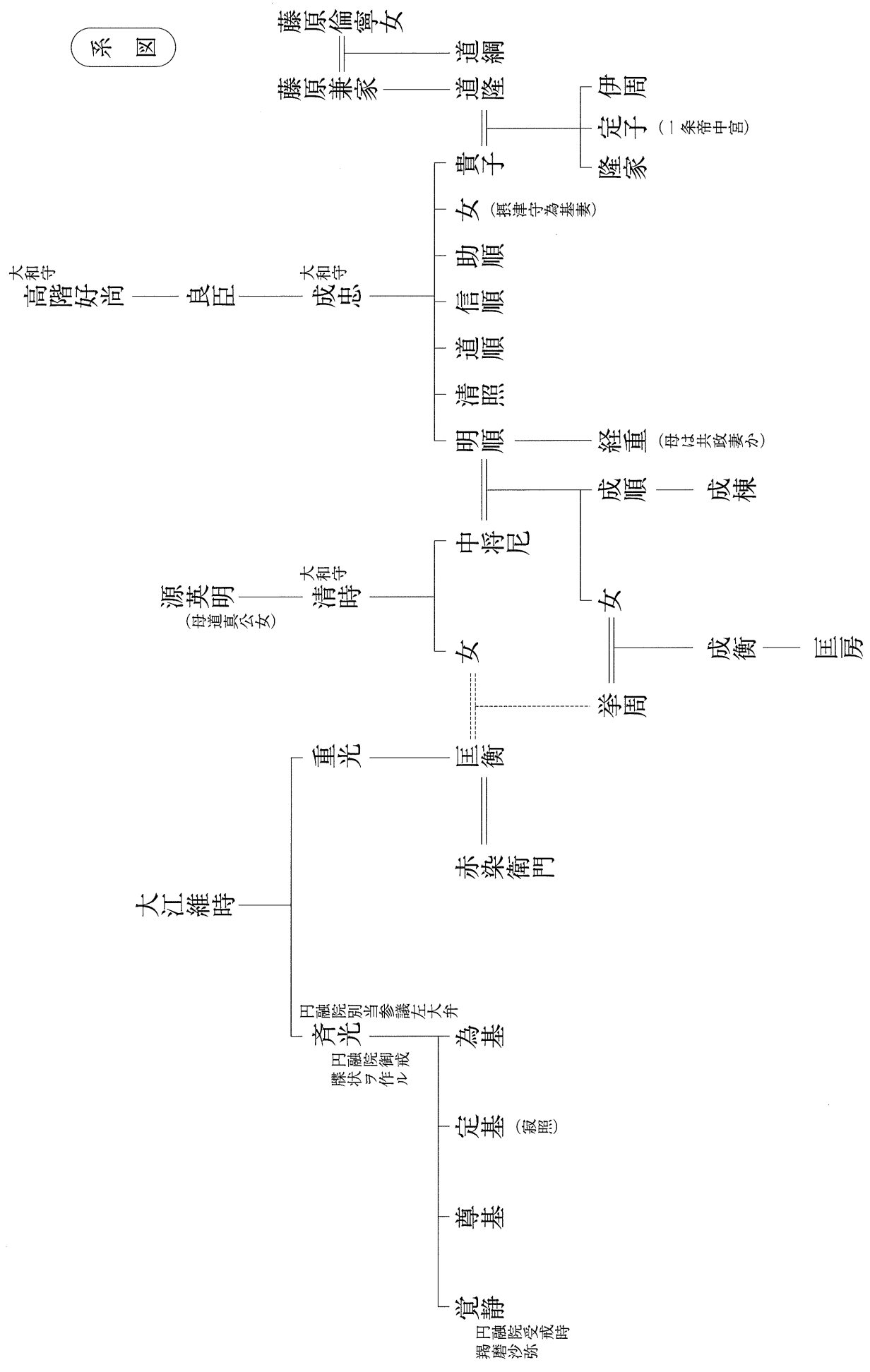
にかきつけさせし

三二 たれとまたふみ通ふらんうき橋のうかりしよりもうきこゝろ哉

田中 恭子(たなか きょうこ)

一九四八年生。一九七三年、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了後、家庭人となる。故関根慶子名誉教授の勧めで「赤染衛門集」の輪読会に加わる。九年前より、源氏物語講座(名古屋)に出講中。論文に「定基僧都の母」(『国語と国文学』昭六十二・三)「江侍従伝新考」(『国語と国文学』平三・三)。共著に『赤染衛門集全釈』(風間書房 一九八六年)『貫之集全釈』(風間書房 一九九七年)。

系 図



分科会D 田中 恭子